別紙様式１

平成２９年度　学長戦略経費（公募型プロジェクト）研究成果概要報告書

経費の種類	□共同研究推進　□若手教員研究支援　■個人研究支援 □研究推進重点設備　□研究推進設備修繕
プロジェクトの名称	ラトゥールのアクターネットワーク理論とタルド社会学
報告者氏名・所属・職名	池田　祥英・函館校・特任准教授
プロジェクト担当者氏名・所属・職名	池田　祥英・函館校・特任准教授

研究内容及び成果の概要

ブリュノ・ラトゥールが提唱する「アクターネットワーク理論」（ANT）は、人間の集まりとして社会を考えるのではなく、人間でないモノや動物などさまざまな非人間も含めた「つながり」（association）として考える立場であり、近年彼はその思想の源流として19世紀末に活躍した社会学者ガブリエル・タルドのモナド論を取り上げるようになっている。タルドが実際に、「モナド論と社会学」（1895年）においてそのような趣旨の主張を行っているのは事実であるが、それがタルドの独自の立場なのか、それとも社会学の対象領域が明確化する以前に一般的に見られた傾向なのかを明らかにする必要がある。

そこで、『動物社会』（1878年）において、細胞間の結びつきや動物個体同士の関係をテーマにしたアルフレッド・エスピナスの主張を検討し、この時代には人間以外の対象を「社会」として位置づけることが一般的とまでは言えないにしても、必ずしもタルドだけの独創とは言い切れないことを明らかにした。

また、タルド自身の社会観も時期によって変化がみられることを指摘した。まず、『模倣の法則』（1890年）においては、人間の世界における純粋に社会的なものを取り出して研究するのが社会学であるとし、その純粋に社会的なものとして「模倣」（imitation）を論じたが、このような立場は、ラトゥールのANTの立場と正反対であり、ラトゥールが「社会的なものの社会学」と呼んで批判する立場に近い。ラトゥールが頻繁に言及する「モナド論と社会学」（1895年）においては、あらゆる事象をその構成要素に分解してとらえ、原子や細胞といったそれらの集まってできたものを「社会」と呼ぶというラトゥールのANTに近い立場を典型的に示している。ただし、このような見方はあくまで仮説であり、現実の社会の分析には用いないことを別の箇所で注意している。さらに晩年に近い「社会的現実」（1901年）や「心間心理学」（1903年）では、人間の精神間の相互作用のみを扱う「心間心理学」と、人間と自然界との関係を総合的に扱う「社会学」を区別しており、むしろこの晩年に到達した「社会学」がラトゥールのANTに近いということがわかる。

成果の公表の状況

【著書】

【学術論文】

教育現場で活用可能な分野・教材等

社会集団論をはじめとする社会学関係科目において研究成果を提示し、「社会」について多様な見方を養うことに活用できる。

配布又はダウンロード可能な資料	http://www.gakkai.ne.jp/jss/research/90/file/229.pdf
問合わせ先	代表者：池田　祥英 電　話： FAX　： mail　：ikeda.yoshifusa@h.hokkyodai.ac.jp